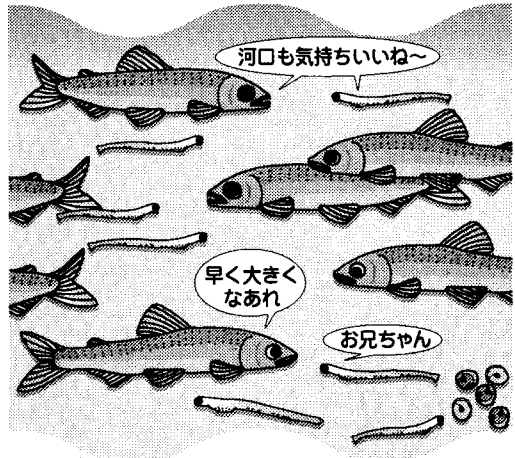


相模川河口域で アユの仔魚生育

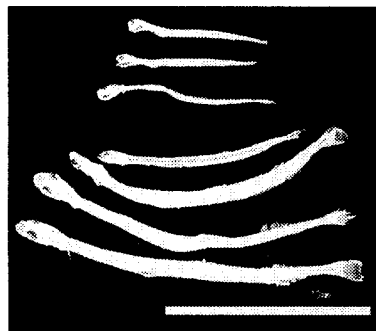
県内水面試験場が確認

相模川の河口域で、アユのふ化した直後の仔魚から遡上期の稚魚までが生育していることが県水産総合研究所内水面試験場の調査で分かった。ふ化したアユは海に下り、そこで稚魚に育って河川を遡上するとされていたが、今回の調査では河口域も成長を助ける「揺りかご」のような水域であることが確認できたという。河口域での生育状況が分かれば、アユの資源量を推定することも可能で、資源保護に期待が持たれている。

海に下らず成長も



The Asahi Shimbun



相模川河口域で採集された体長7~20mmのアユの仔魚 (県内水面試験場提供)

河口域にとどまって育つアユもいることが分かった

調査に当たった同試験場の技師養宮敦さん(34)によると、河口域にとどまる原因は不明だが、川の水量などが影響しているのではないかと、としている。アユの資源量はこれまで、川を下る「流下量」で推定していたが、河口域での採取量を組み合わせることで正確な量

が推定できるとしている。養宮さんによると、20年ほど前に実施された和歌山県熊野川河口域での調査で、仔魚が河口域で育っていることが初めて分かった。高知県の四万十川河口域でも、仔魚から稚魚までが生育していることが確認されているという。

アユはふ化したての仔魚から、再び川に戻る稚魚までの間に減る率が最も高いとされる。調査はこれまであまり解明されていなかった海での生態を明らかにし、資源量を変動する要因を明らかにしようとして実施された。

河口域に着目したのは、「アユの生育にとって重要な水域」との報告が相次いでいたことからという。調査は海水と淡水が混じる河口から上流3kmまでの河口域で、01~03年の3年間、ふ化後の10月から遡上期の翌年5月まで月4回ずつ、深さをそれぞれ変えて採集した。

深さや日によって採取量や種類は違ったものの、体長7mmの仔魚から同30mmの稚魚まで各サイズのアユが取れた。その結果、海を回遊するアユ